

# 高句麗は朝鮮の歴史上最大の強国

はじめに――2

「東北工程」に関する朝鮮の学界の立場――曹喜勝――4

高句麗・渤海遺跡に対する最近の  
発掘研究成果について――孫秀浩――33

平壤の高句麗遺跡を歩く――呉陽希――38

朝鮮歴史時代区分表――46

## はじめに

昨年8月5日、朝鮮社会科学院と在日本朝鮮社会科学者協会（社協）代表による学術討論会が、平壤の人民文化宮殿で開催されました。8日には歴史、言語学、経済など分科別集会が行われました。

社協は学術交流センターとしての役割を強化していくため、社会科学院の学者や研究者たちとの交流を重視してきました。今回の学術討論会は、2005年に平壤で共同でシンポジウムを開催して以来3年ぶりに開催されました。

この間、日本当局の共和国に対する制裁措置、総聯と在日同胞に対する不当な弾圧が続いたため、社協メンバーと朝鮮の学者、研究者たちの間の学術交流は困難をきわめました。3年ぶりに行われた討論会では互いの変わらぬ絆を確かめることができました。

社会科学院の院長は、朝鮮民主主義人民共和国創建60周年を迎える年に学術討論会が開催されたことは非常に意義深いことだと述べ、異国の厳しい情勢下でも、絶え間なく自らの研究活動を繰り広げてきた在日朝鮮人社会科学者たちを激励しました。

討論会では、哲学、歴史、経済の各分野で社会科学院傘下研究所の所長や研究者による5編の論文が発表されました。

哲学分野では「先軍思想の理解を深めるうえで提起されるいくつかの問題について」（ソ・ソンイル・社会科学院哲学研究所室長）、歴史分野では「高句麗、渤海遺跡に対する最近の

発掘研究成果について」（孫秀浩・社会科学院考古学研究所所長）、「『東北工程』に関する朝鮮の学界の立場」（曹喜勝・社会科学院歴史研究所所長）、経済分野では「強盛大国の大門を開くための経済強国建設闘争」（リ・キソン・社会科学院経済研究所研究員）、「現時期における社会主義経済管理の改善」（キム・チョルチュン・社会科学院経済研究所所長）などが発表されました。

とくに、東北アジアの国々で歴史教科書問題、歴史認識問題がクローズアップされる中で今回発表された歴史分野の2編の論文は、朝鮮の歴史、高句麗問題を正しく理解するうえでたいへん貴重なものだといえます。

この度のブックレットでは、歴史分野の2編の論文を紹介します。少し専門的な内容ですが日本で、『東北工程』に関する朝鮮の学界の立場」と「高句麗、渤海遺跡に対する最近の発掘研究成果」が紹介されるのは初めてのことです。一読していただければ幸いです。

朝鮮社会科学院の惜しみない協力に感謝の意を表しつつ、これからも学術交流センターとしての役割を強化していくため、社会科学院はもとより日本、南朝鮮の学者や研究者たちとの交流をよりいっそう深めていく所存です。

2009年3月31日

# 「東北工程」に関する朝鮮の学界の立場

## 1. 高句麗は朝鮮民族の国家

曹喜勝（社会科学院歴史研究所・所長） 訳…金洪圭

現在、中国の「東北工程」の提唱者たちは、高句麗族の起源が中国から出たものであるという誤った主張を展開し、高句麗が中国の少数民族国家であったとしている。

高句麗族の起源が中国であることは、事実上、高句麗の建国と発展に直接に寄与した高句麗の人々が、中国人であったというのと同じである。

しかし、これは高句麗の歴史をはなだしく歪曲する主張だと言わざるをえない。

彼らの主張は、高句麗の住民たちが「高夷」系統であるとか、「商（殷）」系統であるとか、中国の伝説的な人物である「炎帝」の後裔であるとか、諸族が集まった集団である、といった独善的で強引なものであり、一考の価値もない。一部の高句麗住民たちを「扶餘」系統や「濊貊」系統とみなす見解がある。しかしそういった見解すらも、扶餘は肅慎族として、濊貊は今日の中国山西省と河北省一帯に住んだ後東北地方に移動した「夷」として描写している。

このような主張はみな、科学的妥当性の欠如した一方的な論理である。

その根底には、朝鮮民族の誇りである高句麗を朝鮮史から切り離し、中国史の一部とし

て組み込もうとする意図がうかがわれる。

高句麗は、徹頭徹尾、檀君朝鮮の後裔たちによって創建された、朝鮮民族の国家である。高句麗が、檀君朝鮮の後裔たちによって創建された朝鮮民族の国家であったということは、その住民たちが朝鮮民族の主要な構成員であったという事実をもって証明することができる。

高句麗の住民たちが朝鮮民族の主要な構成員であったということは、まず、その建国過程を通じて充分に知ることができる。

高句麗の建国過程を伝える説話や歴史記録などが物語っているように、扶餘出身の朱蒙が南方へ移動して高句麗を建国したのである。当時、その地域には「句麗」と呼ばれる国家が存在していた。

高句麗は、句麗の領域に建国された、朝鮮の歴史で最初の封建国家であった。高句麗の建国に直接参加した人々は、他でもなく先行する句麗の住民であり、高句麗の基本的構成員となったのも句麗の旧住民であった。

古代国家の句麗が、紀元前15世紀中葉、古朝鮮における前朝鮮王朝（檀君朝鮮）から後朝鮮王朝への移行期に古朝鮮から分立した独自の国家であったことは、よく知られた事実である。すなわち句麗は、前朝鮮の領域内において前朝鮮の住民たちによって建国された、朝鮮の古代国家であった。

このように見ると、句麗の領域を領土とした高句麗は、前朝鮮の領域と住民をそのまま受

け継いだ国家であったと言える。

一部の記録では、高句麗が扶餘の別種として、扶餘から生まれたものだと言っている。これは、高句麗の建国始祖である東明王をはじめとする高句麗建国勢力の一部が、扶餘出身の人々であった、ということから生まれた認識である。

建国説話にも残されているが、東明王をはじめ高句麗の初期に大きな役割をはたした烏伊<sup>うい</sup>、摩離<sup>ま</sup>、陝父<sup>きやうふ</sup>らは、東明王とともに句麗地域からきた扶餘出身の人々だった。扶餘人の一部が句麗地域に移住し建国したからということをもって、高句麗の人々が朝鮮民族と性格を異にするということは決してありえない。扶餘と句麗はともに朝鮮民族の国家であり、その住民たちも血統と言語、文化を同じくする朝鮮民族であるからだ。

扶餘は句麗と同じように前朝鮮の領域内で侯国として誕生したが、紀元前15世紀中葉、前朝鮮の統治力が急速に弱まった結果、後朝鮮王朝が成立するとともに独立国家となった朝鮮の古代国家である。

これまでの研究成果では、紀元前3000年期の後半期、すでに朝鮮民族はひとつの民族として形成されていた。したがって、古朝鮮、句麗、扶餘は血統と言語、文化を同じくする同族の国家だと言える。高句麗と扶餘が言語をはじめ様々な側面で多くの共通点があることが記録されている。また、扶餘の統治者の迫害を避けて句麗地域に移住した朱蒙が句麗王の婿になり王位継承者になった事実などは、句麗と扶餘の人々が同じ系統に属する集団であったことを実証するものだ。「高句麗が扶餘の別種である」という記録は、扶餘と高句麗が異

なる族属系統だったという意味ではなく、地域の違いはあっても血縁的には非常に近い集団であったことを強調するものと見るべきだろう。

高句麗の人々が、朝鮮民族の主要成員だということは、次に、建国初期の高句麗の人々を「濊貊」と呼称していたことでもわかる。

『漢書』王莽<sup>おうもう</sup>伝をはじめとする歴史文献は、高句麗の人々を「貊」または「濊貊」などと記録している。『後漢書』東夷伝には「句麗は一名貊である。その別種が小水に依拠して居住したために小水貊と言う」と、伝えている。

高句麗の人々を「貊」「濊貊」と呼ぶのは、彼らが「濊貊」族と血縁的に直接関連があるからだと思われる。濊貊は、「朝鮮の古類型人」の後裔の一部として、今日の朝鮮半島中部以北の地域と中国東北部一帯で活動した古代部族で、朝鮮民族の主要成員だった。

もともと「濊」「貊」という言葉は、古代中国人が古代朝鮮人を蔑視して生まれた呼称である。高句麗建国を前後する時期の中国の歴史書は、古朝鮮を「濊貊朝鮮」と記述していた。『史記』や『漢書』などの歴史書には、「濊貊朝鮮を撃ち『滄海郡』を設置した」「漢の武帝が濊貊朝鮮を征伐した」などと記録されている。これは、濊貊が古朝鮮と不可分の関係にあったことを示している。

本来、「貊」の音は「毫（バク）」であり、それは、古朝鮮・古朝鮮人をそれぞれ「發朝鮮・「發人」とした記録や檀君が「朴達（バクタル）」を意味することと通じるものだ。早い時期の朝鮮と関連することがらについての中国側の記録には、「夫妻（ブル）（不・發・毫）」と

表記されていたものが、後時期の記録に「貂」の字が出てくるのは、このような理由からである。

「貂」と同系統の族属であった「濊」も同様である。東北アジアの広い地域に散在し居住していた朝鮮の祖先は、地域ごとに多少の言語の差異があった。「明るい」「光明」を意味した「夫妻」「不」「發」「毫」という言葉を、ある地域では「𪛗(セ)」と、またある地域では「韓」と言った。「𪛗」は、古代の朝鮮語である「사라(サラ) / 사라(ソロ) : 사라(サリ) / 사리(ソリ) : 사(サ) / 사(ソ)」を語源としており、「明るい」の意味(東・黎・新)を表すもので、「夫妻」と同様の意味の言葉である。古代中国人は、この「𪛗(セ)」から音をとって「𪛗(歳)」を音部とし、ここに「禾(または水)」偏を付けて古朝鮮の人を賤視する文字を造った。それが「濊(または穢)」である。

このように「濊貂」という言葉は、古代中国人が大国主義により古朝鮮の人々を賤視する呼称として生まれた言葉であった。それを高句麗の人々にまで用いたのである。

古代中国人が、古朝鮮の人々の呼称として用いた「貂」「濊貂」を高句麗の人々に対しても用いたのは、高句麗の人々が古朝鮮からの血統、言語、文化を受け継いだ同胞であったこと、高句麗が檀君朝鮮の後裔たちによって建てられた朝鮮民族の国家であったことを示す根拠と言える。

高句麗の人々が朝鮮民族の主要成員だったことは、高句麗、百済、新羅の人々が、血統、言語、文化を同じくしていたという事実を通じても確認できる。

高句麗、百済、新羅の三国が存在した時期を三国時代という。百済、新羅、伽倻の発生地が本来、馬韓、辰韓、弁韓から構成されていた古代辰国の地域であったことは周知の事実だ。この「三韓」の人々も高句麗と同じ同胞であった。『漢書』の内容を解説した唐の人である安師古は、「三韓の族属たちはみな貂系列」とし、高句麗と百済、新羅の人々を同じ系統と見ていた。

実際に馬韓、辰韓、弁韓の三韓地域は、前朝鮮からわかれて出てきた古代辰国の領域であり、その住民である「韓」も古代朝鮮族の系統である。

高句麗を建国した東明王の息子である温祚が多く of の住民集団を率いて南の方へ移動して馬韓地域に定着し百済小国を建てたこととか、辰韓の人々が楽浪の人々を自分の「残余人」とみなしていたという記録などは、中部朝鮮以南の地域の人々も高句麗の人々と同系統の住民であったことを物語っている。

三国の人々が同系統の同胞であったということは、多くの文献および考古学的資料などによって言語および文化的共通性が確認されていることからわかる。高句麗、百済、新羅の三国の人々が、血統、言語、文化を同じくしたのは、百済、新羅、伽倻の人々が高句麗と同じく「朝鮮の古類型人」に根をおく古代朝鮮人の後裔であって、古くから同じ領土の上でもに居住してきた同民族だったためである。

以上見てきたように、高句麗が檀君朝鮮の後裔が建てた朝鮮民族の国であったことは疑う余地がない。高句麗の人々が「商人」系統であり「炎帝」の後裔であるとするのは、歴史的



事実を歪曲するものである。

## 2. 「東北工程」で提起された領土問題に対する朝鮮の立場

「東北工程」で提議された領土問題に対するわれわれの立場に変わりはない。

古朝鮮と高句麗は、わが朝鮮民族の代表的な最初の奴隷所有者国家・封建国家として、一度も中国の属国になったことはなく、その領土もやはり中国の領域内に属したことがない。この地域は、朝鮮民族が最初に開拓し利用したところであり、祖先代々わが同胞の居住地だった。

しかし、中国の歴史学界は「東北工程」を推進しながら、古朝鮮や高句麗などのわが民族国家が中国の地方政権、諸侯国であり、またその領土も歴代にわたって中国の領域から抜け出たことはなかったと主張している。

中国がいう「学術的根拠」の問題点は次の通りである。

- ① 古朝鮮や高句麗が占めていた地域は、周・秦以来、すべてが中国の領土であった。
- ② 高句麗は玄菟郡高句麗県において発生したが、その地域は漢の領土であった。
- ③ 高句麗はその全期間、中国と臣属関係を結んだ地方政権で、その領土も中国の領土に属していた。

④ 高句麗が滅亡した後、その領土は中国に編入された。

⑤ 現在まで中国は、高句麗の旧領土を占めていたので、高句麗は中国の歴史に含まれる。

以上の主張は、わが国の歴史から古朝鮮や高句麗を分離するためにつくられた詭弁にすぎない。

以下、中国の歴史学界の主張を一つひとつ検討し、その間違いを指摘する。

第一に、「古朝鮮や高句麗地域は周以来、中国の領土だった」という主張を検討する。

高句麗が占めていた地域が、周以来中国の領土であったということは、つまり周以前は中国の領土ではなかったという意味になる。周の時期から高句麗地域が中国の領土であったという中国の主張は、「箕子朝鮮説」にその根拠を置いている。

古代において領土は、誰が先に開拓し利用したかによって所属がきまるのが慣わしである。中国は、紀元前11世紀頃になって建てられた周の時代から、遼東地域と朝鮮半島地域が中国の領土であったとするが、この地域はそれよりも2000年ほど前からすでに朝鮮の人々によって開拓され利用された土地である。

わが国の学界は、1993年に檀君陵の発掘過程で檀君の遺骨を発見し、それが現在から5011±267年前のものであるという科学的な結論に到達した。このことは、わが民族の最初の国家である檀君朝鮮が、紀元前30世紀初、遼東地域と朝鮮半島を領域とし建国され

たことを考証するものだ。

中国の最初の国家であるという夏<sup>か</sup>は、早くても紀元前21世紀に建てられたが、朝鮮はそれより遙か以前に民族国家を形成したのである。遼東地域と朝鮮半島は代々朝鮮人の土地であり、けっして中国人が開拓した土地ではなく、周以来、中国の領土であったということはありえない。

「箕子朝鮮説」を伝える基本的な歴史書は『尚書大伝』『史記』『漢書』『三国志』『後漢書』などがある。これらの史書の記述を見ると、箕子に対する内容が一貫していない。

『尚書大伝』巻2殷伝洪範「手本となるような大法の意」篇では、「武王が殷国に勝った後、箕子を釈放するや、箕子は周が釈放したことを我慢することができなくて朝鮮に行った。武王が「これを」聞いて朝鮮に封じた」と叙述されている。一方、『史記』巻38宋微子世家は、「武王が殷に勝ち、箕子を訪問した。（洪範）を聞いた後に）……この時に武王が箕子を朝鮮に封じたが、（箕子は）臣下と思わなかった」としており、『漢書』巻28地理志卷第八下、燕地条には、「殷国において道が衰退すると箕子は朝鮮に行き百姓に礼儀と農事・養蚕・機織などを教えた（殷道衰、箕子去之朝鮮、教其民、以礼義・田蚕・織作）」と叙述されている。

『三国志』滅伝には、「昔、箕子が朝鮮に行つて『八条の教え』を制定して教えた。……その後40余世代がすぎ、朝鮮侯の準が、僭越にも王を称した」と叙述されており、その後に編纂された史書などには箕子関係の叙述がより体系化されている。

箕子関係の叙述が、歳月が過ぎるにつれてより一層潤色され体系化されており、またこの

関連記述の間に矛盾点が多いということがわかる。箕子が朝鮮に行った時期について、『尚書大伝』では彼が周の武王に「洪範」を教える以前の時期に、『史記』では「洪範」を教えた以後の時期とし、『漢書』では「殷において道が衰退した」時期、すなわち殷が滅亡する以前の時期と描写している。

そればかりでなく、箕子が朝鮮に来て何を行ったのかについては何も叙述はなく、ただ中国にいた時の史跡だけが記録に残っている。もし箕子が朝鮮へ実際に来たならば、中国の史書にその時期が正確に記録されていなければおかしい。また、箕子が「朝鮮王」になった内容とその後の史跡が相当程度残っていないければおかしい。

中国の史書の箕子関係の叙述があいまいで一貫していないのは、中国の歴史研究者たちが、ありもしない事実を自分たちの都合のいいように捏造したためである。箕子が朝鮮に来た時期さえ正確に記録されていないのに、その後、箕子が朝鮮で王になり国を治めたということを経史的事実として証明することはとうていできないはずだ。

しかも、敵対国の没落した貴族で自国の政権を認めない箕子に、周の武王が「朝鮮」という他国の領土を与えることはありえない。箕子は、殷から弾圧を受け武王に反対して「朝鮮へ逃げた」人間である。亡命客にすぎない箕子が、朝鮮に来て古朝鮮の統治勢力を追い出して王権を占めることができたのだろうか。箕子は朝鮮に来なかつたとするほうが自然だ。

何ら理論的根拠もない伝説的な話をもとにして、古朝鮮の後代の王たちがみな箕子の後裔であり古朝鮮が古くから中国の領土であるという主張は、なんら説得力をもつものではない。

第二に、「高句麗は玄菟郡内において発生したが、その地域は漢の領土であり、したがって高句麗は中国の領土だった」という主張に対して検討する。

この主張は、高句麗が紀元前37年に建てられたという前提のもと、当時、玄菟郡に同じ名前の「高句麗県」が存在したことから生まれたものだ。

朝鮮の学界では、『三国史記』に書かれた高句麗建国の記述が間違いで、高句麗は実質的に紀元前277年に成立したことが証明されている。高句麗は、秦の時代から中国の領土外に存在した国家だった。このことを証明するものとして、『三国史記』高句麗本記の史論と万里長城の築造がある。

『三国史記』高句麗本記末尾の史論には、「高句麗が、秦・漢の後より、中国東北の隅に介在していた（高句麗自秦漢之後、介在中国東北隅）」と記述されている。もし高句麗が中国に属する国であったなら「中国の東北隅に介在していた」とは記述されず、「高句麗は秦・漢以来、中国に属していた」と記述されているはずだ。この記録は秦当時、すでに「高句麗」という独立した国家が、中国とは別に存在していたことを示している。だから、高句麗が紀元前37年に玄菟郡内で成立したという主張はなりたたない。

さらに、秦の時代に造られた万里の長城も、高句麗が中国に属していないことを示している。万里の長城は、中国と異民族を分ける境界線と同じようなものだ。万里の長城は、他の民族・国家からの侵入を防ぎ国を守るために造られたものである。

もし、古朝鮮や高句麗が古くから中国に属していたとするなら、万里の長城の東側境界は「山海関界線」ではなく、古朝鮮・高句麗までを含んだところでないといけない。古朝鮮や高句麗が万里の長城の外に存在していたのは、中国に属していないからで至極自然なことである。

漢の武帝が、紀元前108年に「高句麗を県にして所属させた」という記述があるが、かにそれが真実だったとすれば、紀元前108年になって初めて高句麗が中国に属したということである。それ以前は高句麗が独立国であったということであるし、そもそも高句麗が紀元前37年に建国されたという記述と矛盾する。中国が主張する、高句麗が紀元前37年に中国の統治領域である玄菟郡高句麗県内で成立したということ自体がありえないのである。

漢は、主権国家である古朝鮮を、自分に逆らうと戦争を起こして滅亡させた国である。他国を滅ぼすほどの領土欲に狂った漢の統治者が、自国の末端統治機構である高句麗県で、朝鮮民族の主権国家である高句麗が成立することを黙認し放任することは、絶対にありえない。玄菟郡高句麗県令の直接管理のもとにある地域で、どうして朝鮮人が「高句麗」という国号をもつ国を建てることのできたのだろうか。

中国の学界では、「玄菟郡高句麗県令が、その名籍を管理していた」という記述を、「高句麗県令が高句麗国家の戸籍を掌握管理した」とものと解釈している。一県級の官吏がこまかな戸籍まで掌握していたとすれば、漢は人口を詳細に知るほどに高句麗を確固として掌握統制していたということになる。漢の厳格な統制を受けていたとするなら、高句麗がその後に「漸



次、驕慢になり」、漢が下賜する贈り物までも受け取らないようになり（注…『三国志』巻30、魏書、烏丸寺伝参照）、対決することができたのか、また漢は高句麗のために玄菟郡東側の境界に城まで築造して贈り物を継続しようと努力したであろうか。

宗主国が驕慢になった属国のためにわざわざ城まで築いて贈り物を送ったということは歴史上ありえない。高句麗が、漢と対等か優位な位置にある存在であることを示すものだ。

第三に、「高句麗はその全期間、中国と臣属関係を結んだ地方政権で、その領土も中国の領土に属していた」という主張について検討する。

朝鮮の学界は、高句麗が中国と対等な関係、もしくは中国を圧倒する強大な国家であったということを論証した。高句麗は代々、中国と臣属関係にあったのではなく、対立の関係にあり、絶え間なく戦争状態にあった。

高句麗は、千年近いその歴史の中で、中国の数多い封建国家と対外関係をもった。史料によると、高句麗の存在期間、現在の中国と蒙古地域には35の国が興亡し盛衰を繰り返しており、そのうち高句麗は24の国と対外関係を結んでいた。そのうちの15の国―前漢、新、後漢、曹魏、西秦、前燕、前秦、後燕、北燕、北魏、東魏、北斉、北周、隋、唐―は、地理的に高句麗と隣接した国であるが、高句麗は前秦、北燕、東魏の3国とは平和的な関係を保ったが、残りの12の国とは終始一貫、厳しい軍事的・政治的対立の状態にあった。

これらの国々の存続期間は、高句麗と比べることができないほど短い。歴史、国力で中国

の国々を圧倒していた高句麗を、臣属国家にすることができるだろうか。

中国の歴史上、もつとも強大な国として知られている隋も、高句麗侵略のために国力をすべて傾けたが、毎回大惨敗を繰り返し国が滅びる結果をまねいた。唐は高句麗を崩壊させたが、それは高句麗の内部の混乱を利用し高句麗の投降者たちと新羅の「支援」を受けて、初めて可能だった。中国の歴代国家は国力において一度も高句麗を圧倒したことはなく、高句麗は中国よりも強大であった。高句麗は、千年近い間、中国の侵略勢力から領土を守り続けてきた。

したがって、高句麗が中国の領土であり、終始一貫して中国の臣属国家だったとする主張は、まったく根拠がない。

第四に、「高句麗が滅亡した後、その領土は中国に編入された」という主張について検討する。

高句麗滅亡後、領土の3分の2と一部の住民たちが、唐に編入されたのは事実である。しかし領土が占拠されたといって、そこに根を張って生活してきた朝鮮民族の歴史が中国の歴史になり、中国が高句麗を継承したと言うことはできない。民族の文化伝統と民族の総意をそのまま継承してこそ、継承国になることができる。領土の占拠自体が継承国であることを示すものではない。唐は、高句麗の領土を侵略により略奪したが、高句麗を継承したわけではない。

高句麗は滅亡したが、領土の一部は朝鮮民族のものとして残っていたし、高句麗の人々も大部分は先祖伝来の土地に居住した。

698年には高句麗の後を継いだ渤海<sup>ぼっか</sup>が、高句麗の領土と住民たちを包攝し、三国統一の偉業は、918年に成立した高麗によって完成された。高句麗の領土と伝統、高句麗の人々の思いは、綿々と継承されてきた。

継承と占有は、完全に異なるものである。中国は、一時的に高句麗の一部の地域と住民たちを占拠したにすぎず、決して高句麗の歴史と文化・伝統、その領土を継承することはできなかった。

第五に、「現在まで中国は、高句麗の旧領土を占めていたので、高句麗は中国の歴史に含まれる」という主張について検証する。

現在の国境線を、過去の歴史を分ける基準にすることはできない。

中国は現在、高句麗の領土が、自国の領土内にあることを根拠にして、歴史の帰属問題を論じているが、実際には、高句麗の領土が全部中国の領土内に含まれているのではない。高句麗の領域は、現在の中国とロシア、朝鮮にまたがっている。中国が主張するように、現在の国境線を基準に歴史の帰属問題を論ずるならば、高句麗の歴史は中国とロシア、朝鮮に属することになる。中国が高句麗の歴史を自分だけの歴史だと主張する根拠はまったくない。

歴史の帰属問題は、継承性の原則、言い換えれば高句麗の歴史と文化伝統を誰がどのよう

に継承してきたかによって規定されなければならない。

高句麗の歴史を代々継承してきたのは朝鮮民族であり、中国ではない。現在の国境線が歴史の帰属問題を規定するものでないというのが、朝鮮の確固たる見解である。

以上考察したように、古朝鮮、高句麗の歴史の帰属問題に関して中国が推進する「東北工程」は、徹頭徹尾いかなる科学的論理や根拠もなく、他国の歴史を歪曲するものである。

古朝鮮、高句麗の歴史は、朝鮮民族の誇りある歴史である。朝鮮民族の歴史は、中国のように数多い少数民族の各々異なった歴史によって構成されたものではなく、檀君を始祖として代々、一つの領土で、一つの血統を継承し、一つの言語をもって、一つの民族文化の花を咲かせてきた、輝かしい単一民族の歴史である。朝鮮民族の歴史は、誰にも引き離すことができない神聖なものである。朝鮮民族だけが、高句麗をはじめわれわれの歴史を輝かせ守ることができるというのが、われわれの立場である。

### 3. 「冊封」「朝貢」に対する朝鮮学界の立場

「冊封」「朝貢」に対して正しい観点と立場をもつことは、単純な学術上の問題ではなく、中世の時期において国家間の関係を正確に把握するために重要な問題である。

朝鮮の学界では、以前から民族の歴史を正しく定立するうえで、「冊封」「朝貢」がもつ重

要性に注目し、学界の立場を反映した各種の関連論文を発表してきた。ここでは、再び「冊封」「朝貢」に対する朝鮮の学界の立場を明確にする。

「冊封」「朝貢」に対する朝鮮の学界の立場は、「冊封」「朝貢」が中世の国際関係に存在した封建的な儀礼規範であるということ、同じ言葉を用いた別のことから封建時期における国家間の関係に当てはめようという考察は歴史研究の原則からはなはだしく逸脱した誤ったものだということである。

周知のように「冊封」「朝貢」は、分封制と同様の社会制度を土台として発生発展した。地方分権的な分封制が支配していた環境において、「冊封」「朝貢」は一国の最高君主と諸侯たちとの間の主従関係を媒介する手段であった。

一国内の制度であった「冊封」「朝貢」は、中世に至って次第に国家間の関係に拡大適用されはじめ、中国の南北朝時期に国際関係における普遍化された儀礼的規範となった。すなわち、「冊封」「朝貢」は、国内と国家間に適用される二重的性格をおびたものとなった。一部の研究者は、古代において中国の統治者たちには「中・外」の区別がなかったとして、「冊封」「朝貢」の二重的性格を否認しているが、事実はそうではない。

前漢時代から中国の統治者は、古朝鮮を自国と違う国だという意味で「外臣」と呼んだ。南越（中国の広東、広西地域）もやはり前漢の「外藩」と見なされていた。また高句麗に対しても、自国と区別し「外」と見なし、高句麗を百濟、新羅と同じ朝鮮民族の国家としてみていた。それを示す代表的なものとして、唐は、高句麗、百濟、新羅を中国の魏、蜀、呉の

三国に対比させ、朝鮮の三国という意味で「海東三国」「三韓」と通称していた。

「西南夷」「東夷」「四夷」などのいくつかの列伝の名称が示しているように、中国にとって「外」として見なす国々は、すべて自分と異質な対象に対する卑称である「夷」〔狄、戎、蛮、蕃人〕という言葉をつけ、列伝としてそれらの国々のことはまとめて叙述した。「四夷」列伝は「異域」列伝として呼ばれもしたし、後世には「外夷」「外国」列伝に改称された。

当時、中国側の観点で見たとき、中国二十五史の「四夷」列伝に記述されている国は、だいたいの中国の国家と別の関係にある国であることがわかる。中国歴代の封建統治者が、国際関係に「冊封」「朝貢」を組み入れたのは、彼らの自己中心的な儒教の世界観のためである。

中国の封建王朝は、自国を世界の「中心」に置き、その他の国の存在を認めていた。そのため、自国と関係をもっていた他国の統治者に各種の「名誉称号」を贈る「冊封」政策を行い、一方において他国が外交貿易関係で「朝貢」儀礼を行うことを要求した。このような関係に従わない国は交渉対象国として認めず、外交貿易関係を結ぶことを拒否した。また他国も、中国の封建王朝と政治、経済、軍事、文化など多方面にわたる関係を結ぶため、「冊封」「朝貢」の関係に従うようになった。

中国周辺の国々も中国王朝の要求に従ったり黙視的な態度を取ったことによって、南北朝の時期にいたり「冊封」「朝貢」は、国際関係において一つの儀礼的規範となった。「冊封」「朝貢」は、本質において中国の歴代封建統治者の自己中心的な世界観に基づいて儀礼化した、国家間の格差などの関係を反映した、中世の東方アジアにおける一つの国際慣例であった。

「冊封」「朝貢」は、虚偽で空虚な完全な虚礼虚式であった。「冊封」「朝貢」が虚偽だというのは、中国が古代ローマ帝国と同じように、大国で敵対関係にあった国など「冊封」「朝貢」関係に従わない国に対しても、恣意的に「冊封」「朝貢」という用語を使用したことをみてもわかる。

「冊封」「朝貢」がみせかけにすぎなかったことは、中国の封建統治者自身も認めていた。唐の高祖李淵は「名目と実際の間には、理致〔道理〕が互いに合致しなければならない。高麗（高句麗）が隋国に称臣したが、最後には煬帝に抗拒したので、どうして臣下にしたと言えるだろうか。私は万物を尊敬し、驕慢には行動しようとは思わない。ただ、自分の土地を所有して人々を平穩にするのに努力すればよく、何故に彼をして臣下と称して自ら尊大になれるだろうか」と述べた。李淵は、高句麗と隋との関係を実例に挙げて、他国をして「称臣朝貢」させるのに自らを尊大化させることは不必要であると考えていた。

しかし中国王朝は、「冊封」「朝貢」を中国と他国との関係で、自国の優位性を強調するためのものとみなしていたので、他国を中国に「称臣朝貢」させた。

一部の学界では、「冊封」「朝貢」などの言葉を一面的に解釈し、いわゆる「冊封体制」について云々している。彼らは、中国が「冊封」の貢杆〔てこ〕を利用して他国を交渉対象から除外しようとしたが、それが当時の東アジアの国際関係において大きな作用を及ぼしたかのように主張しており、はなはだしくは「冊封」「朝貢」という言葉が使われていたというだけで、中国との主従関係、隷属関係があったという誤った見方をしている。このような「論

理」は特に、朝鮮民族の主権国家であった高句麗を中国の「少数民族地方政権」とみなすために使われている。

しかし、すでに考察したように、「冊封」「朝貢」は儀式的な国際規範であり、実際には主従的性格を帯びるものではなかった。

ある国は、内外の事情から中国王朝に「冊封」を要求したり、経済的利益を打算して中国の拒絶にもかかわらず「朝貢」形式の貿易を活発に行うことを要求することもあった。しかし、一度も中国を宗主国として見なしたことはなく、同等な国として見ていた。中国王朝を大国として見ていただけで、宗主国として対したことはなかった。中国王朝も他国が「称臣朝貢」の関係にあることで満足し、その国の主権を侵害したり支配者として振る舞うことはなかった。

中国王朝は、支配しようとする国に対しては、属国のままにしておかなかった。それは、前漢が古朝鮮を侵略して王朝を転覆しその地域に「漢四郡」を設置しようとしたこと、西域の諸国に対して直接統制のために属国都尉を置いたこと、唐の時期に異民族地区に数多くの羈縻府州を置いたこと、元の統治者が高麗に対し郡県を置かなければならなかったことなど、様々な歴史的事実が実証している。

隋、唐が高句麗を侵略したのも、歴代中国王朝の東方支配に強く歯向かい自国に手痛い思いをさせてきた高句麗を滅亡させ、東北アジアの支配者として君臨しようとする野望によるものであった。



建国初期から中国の封建王朝と数十回にわたる反侵略闘争を果敢に繰り広げ国の自主権を死守した高句麗を、「冊封」「朝貢」という言葉をもって、中国王朝に隷属された存在とするのはたいへん誤った論理である。

三国時期、高句麗に対する中国王朝の「冊封」は、みな一方的に行われたものである。

事大主義が存在しなかった高句麗では、中国王朝に認めてもらうための統治者に対する「冊封」を要請しなかった。高句麗と関連する記録にある「冊封」は、中国の封建王朝の大国主義的な対外政策の産物であり、高句麗の王権と政治制度を何ら規制するものではなかった。かえって中国王朝が、強大な高句麗を優待し、または懐柔しようと、中国が先に高位級の名誉称号を贈るなど「冊封」に熱をあげた。

高句麗に関連する記録にある「朝貢」は、高句麗の自主的な外交貿易活動の反映であった。漢（前漢、新、後漢）、魏、西秦、前燕など、中国の歴代王朝との熾烈な攻防戦をくりひろげ、370年にいたって古朝鮮の領土を取り戻す歴史的偉業を達成した高句麗は、中国の南北朝時期から中国王朝と平和的な外交貿易関係を発展させる方向に向かった。

高句麗の外交貿易活動は、三国統一に有利な外的環境をととのえ、国家間の経済・文化交流を発展させようとする高句麗の対外政策からでたもので、自主的に行われたものだ。

中国の南北朝時期に高句麗は、尖鋭化した政治・軍事的対決関係にある南北の二王朝と平等に對し両面的な外交貿易活動を展開した。これは高句麗が当時、中国王朝の属国で朝貢を献ずる存在ではなく、中国での二国家の対決状況を、自分たちに有利な内外政策の実現のため

に利用したものであり、自主的な主権国家だったことを物語るものだ。

中国に統一国家である隋、唐が出現してから、高句麗の外交貿易の使臣団の平均的派遣回数は、南北朝時期に比べて2・6分の1に減少した。もし高句麗が中国王朝に臣属し、彼らに朝貢を献じる国家だったなら、高句麗の使臣団の平均派遣回数は、両時期にわたって同じであったか、逆に分裂時期より強力な統一国家が存在していた時期により増加されていただろう。

経済、文化の側面でも、高句麗の外交貿易活動は実利に基づいて行われ、朝貢とは本質的に区別されるものである。高句麗は外交貿易活動を通じて、中国王朝と互いに経済、文化交流を行い、貿易により一定の利益をあげていた。また、中国を仲介貿易地として、西域の国々とも広範な貿易が行われた。

以上見てきたように、「冊封」「朝貢」は、国家間における主従関係を実証するものではない。封建時代も現在も、国家間の関係を規定する根本はその国の自主性にある。「冊封」「朝貢」は非本質的なものであり、それをもって国家間を主従関係、隷属関係として解釈するのは、歴史に対する正しい態度ではない。

#### 4. 高麗の高句麗継承認識

中国の学者が「東北工程」の一環として『光明日報』（2003年6月24日付）に発表し

た論文「高句麗歴史研究のいくつかの問題についての試論」は、終始一貫、科学的論拠がなく、朝鮮民族の歴史、とりわけ高句麗史をはなだしく歪曲したものである。

高麗が高句麗を継承したという認識は、一般的常識である。しかし論文の筆者たちは、「高麗は高句麗を継承したものでなく、新羅を継承したもの」として、その「論拠」を三つあげて説明している。

ここでは、論文が主張している「論拠」が歴史的事実に合わない何ら理論的根拠もない荒唐無稽なものであること、高麗は高句麗を継承した国家であるということ、この2点について朝鮮の学界の立場を明らかにする。

まず、論文が主張している論拠はどのようなものであり、その誤りはどこにあるのかについてみてみよう。

論文が主張する「高麗が新羅を継承した」という論拠の第一は、高麗と高句麗の政権成立時期に顕著な差異があり、歴史発展のルーツが互いに異なるということである。

王氏高麗は、高句麗が滅びた668年から250年が経過した918年に成立し、935年に朝鮮半島の他の一つの政権である新羅に代わった（継承）と論文は主張する。論文は、250年という時空間的差異を有力な「論拠」としてあげ、高句麗の民族的伝統はすでに断絶したと主張する。しかし、朝鮮民族の民族的伝統は、歳月が過ぎても変質したりなくなることはなかった。朝鮮民族は、単一民族として古朝鮮↓高句麗↓渤海↓高麗↓朝鮮王朝と、

自らの民族的正当性を綿々として継承してきた。高句麗の滅亡後の250年間も断絶することとはなかった。高安勝の高句麗国、弓裔の高麗きやうい―後高句麗国など、高句麗を継承した国々が存在していたし、渤海王も自身を高句麗王といった。これは高句麗滅亡後、高麗まで一つの民族としての歴史的継承性を維持してきたことを物語っている。

もし論文の論拠のとおり、時空間的差異をもって歴史的継承性、民族的正当性を論ずるとすれば、数十の多民族国家が混在し国の興亡盛衰を繰り返してきた中国の歴史も、継承性、正当性があると言えるだろうか。

歴史発展のルーツについては、高麗は935年になって新羅を継承したのではなく、その以前の918年に高句麗を継承して成立し、935年に新羅を統合して朝鮮における最初の統一国家を実現させたことを正確に認識しておく必要がある。

論文の第二の論拠は、高麗の管轄する領土の住民構成に関する問題である。

論文は、高麗建国時期の住民構成が三韓、すなわち辰韓・弁韓・馬韓で起こった新羅の人々が基本であるため、高麗は新羅を継承したと主張している。しかし、それは歴史の流れとその発展段階について深く考察したものではない、ある種の「偏見」にすぎない。

668年の高句麗滅亡後の住民構成を見ると、大きな変化はなかった。高句麗の遺民たちは、限らない反侵略闘争によって唐の侵略軍を追い出し、高句麗の領土を中心に698年には渤海国を、901年には高麗―後高句麗（911年に泰封国たいほうこくに改称）を建てた。918年、王建が政変を起こして高麗国を創建したが、王建自身も高句麗の遺民出身であつたし、高麗

建国で主導的な役割を果たした将帥たちと軍士たちもみな高句麗の遺民たちの後裔たちであった。また国家の基本領土も昔の高句麗の領土であった。

これらをもみても、高麗が高句麗を継承したものであることは明らかである。

第三の論拠は、王建は高氏の後裔ではないというものである。論文は、「高麗」という国号が同じだけで高麗は高句麗と血縁的、歴史的継承性がなく、高麗王室の王氏は楽浪郡に居住していた王氏の後裔だという主張をしている。

しかし、記録されている歴史的事実は、王建は厳然として高句麗の後裔だということを示している。

『高麗史』では、高麗の太祖王建の5代祖である虎景は「聖骨將軍」と自称しながら、白頭山から南方へ降って松岳山の麓（高句麗の時代は夫蘇山と呼ばれた）に移住してきた高句麗の遺民であり、彼の祖父・作帝建「諡号・懿蘇景康大王」も弓の名人として有名な高句麗人だったとされている。これは、王建の家門が高句麗人の後裔で地位の高い大貴族であること、すなわち、王建が名実ともに高句麗の遺民の後裔であることを示すものだ。

論文が、「王」氏は中国の姓氏なので王建は漢の楽浪郡の後裔である、とする主張にも問題がある。「王」氏は、楽浪郡にだけ存在したのではなく、西北朝鮮の楽浪国、帶方国にも存在していたし、朝鮮人の中にも少なからず存在していた。朝鮮人の姓氏の中で「金」「李」「朴」「安」をはじめとする中国人と同じ姓氏が多いのは、漢族の後裔だからではなく、漢字になった姓氏を採用したためである。

王氏高麗が新羅を継承したという主張は、朝鮮民族は単一民族でなく、「古朝鮮民族」「高句麗民族」「三韓民族」「百濟民族」「新羅民族」など互いに違った民族が存在していたという誤った見解から出発した、理屈に合わない説である。

論文が必死になって、高麗が新羅の継承国であると言い張るのは、虚構な「箕子・衛氏朝鮮」説を主張することによって、古朝鮮と高句麗を中国の少数民族の地方政権だったとしたことを基に、渤海も中国の地方隷属国家であり高句麗も漢族の後裔で、鴨緑江、豆満江以北が歴史的に形成された中国の「正当領土」であると主張することに、その根本的意図がある。

しかし、論文がどんなに歴史を歪曲しようとも、高麗が高句麗を継承したという歴史的眞実を覆すことはできない。

次に、高麗が高句麗を継承したとする、朝鮮の学界の立場について説明する。

太祖・王建が918年に創建した高麗は、開京（開城）を首都とし、1392年まで五百年近くも存在した封建国家であり、高句麗を継承した朝鮮の歴史上における最初の統一国家であった。

これは、朝鮮の学界における確固とした立場である。それは朝鮮民族史の正当性と関連する重要な問題である。また朝鮮の人々は、高麗が高句麗を継承した統一国家としてその威容を轟かしたことに、この上ない誇りと自負心をもっている。

高麗が高句麗を継承したことを示す根拠について、何点かにわけて見ていこう。

第一に、国の名称を高句麗と意味も音も同じ高麗と呼んだところに、明確に表現されている。

国号は、文字通り国の正式名称である。国号にはその国の人々の志向と念願、歴史的伝統が反映されており、国家の政治制度が集約されている。

「高麗」という名は、高句麗のまた別のひとつの呼び名である。「高麗」という言葉は、「山美しく水清らかな美しいところ」という意味をもっており、高句麗の人々は「高麗」という国号を自慢し誇りに思ってきた。

また、中国と日本の歴史記録には、「高句麗」と「高麗」が同じ言葉、同じ意味として記録されている。『三国遺事』には、弓裔が首都を松岳（開城）に移つた後、国の名称を高麗（または後高句麗）と呼んだと記録されている。その後泰封と改称した弓裔を打倒した王建もやはり高句麗を継承したという意味で、高句麗と意味と音が同じ高麗を国号に定めた。

また『高麗史』には、993年、徐熙將軍が敵將の蕭遜寧との講和談判において、わが国（高麗）は昔の高句麗を継承した国のために国名も高麗とし、首都も平壤に定めた、と述べたことを記録している。これは高麗が、東方の強国であつた高句麗を継承し高句麗と同じ志を実現するという強い決心を示したものであつた。

このように「高麗」という国号は、王建が建てた高麗の国号であるばかりでなく、高句麗そのものであり、その後続く朝鮮王朝や今日に至るまでも朝鮮を指し示す代名詞になった。

第二に、建国始祖・王建も高句麗の後裔であり、建国の時に主導的な役割を果たした多

くの将帥たちと軍士たちもみな高句麗の領土で居住していた高句麗の遺民たちの後裔たちであつた。また、建国初期の国家の基本領土は、往古の高句麗の土地であつたことからいえる。高麗は、このような高句麗勢力の支持に基づいて、高句麗の民族的正当性を継承し、中部朝鮮の往古の高句麗の領土の上に建国されたのである。

第三に、高麗と同じ時期に存在した隣国でも、高麗が高句麗を継承したものであることが共通する一般的常識となっていた。

中国の史書である『旧五代史』『新五代史』『宋史』『遼史』『金史』などの文献には、「高麗が高句麗を継承した」「高麗は元来、高句麗である」「前王の姓は高氏である」「王氏高麗は高氏の地位を継承した」などと記録されている。また『高麗史』（卷二世家、太祖16年3月条）には、933年3月、後唐が高麗に送つた書簡に「王建は朱蒙の祥瑞なる伝統を継承して王になった」としており、『宣和奉使高麗図経』卷2では、1123年5月、高麗を訪問した宋の官吏である徐兢の訪問記を引用しながら、「王氏は高麗の大族（貴族）であつた。高氏（高句麗）の政治が衰弱すると国の人々が、王建が賢明なので国王に立てた」と伝えている。

これら史書が等しく伝えていることは、高麗が高句麗を継承したということであり、共通的な一般的常識になっていたことを物語っている。

第四に、高麗が同族を一つの国家に統合しようとした高句麗の統一志向を継承しそれを実現した、最初の統一国家として出現したということである。

同族の国家と昔の領土を復活させることは、民族としてごく当然なことである。高麗は、



高句麗の統一志向を成し遂げるため、高句麗の往古の首都であった平壤を復旧してここに軍事戦略的拠点を構築し、首都と定める目的のもと建設を進め、平壤を第二首都「副首都」とした。

建国初期には、後期新羅が統合できなかった東西北部の広大な高句麗の領土を統合した。935年には後期新羅を統合、936年には後百濟を統合し、926年の契丹キタンの侵略によって亡びた渤海の数十万の遺民を包摂した。

そして10世紀に高麗は、同族の領土と住民のほとんどを単一の国家体制の下に統合し、民族を代表する最初の統一国家となった。高麗はその全期間において、高句麗の統一志向を完全に成し遂げようと活動を続けたのである。

第五に、高麗人民は反侵略闘争において高句麗の人々と同じく勇敢で愛国的な気質を発揮した。

反契丹戦争と反蒙古戦争において高麗が挙げた輝かしい勝利は、隋・唐の数百万の侵略軍を撃退させた高句麗人民の剛毅な意志と不屈の闘争気質を継承したことを表わす顕著な実例である。

以上、このような事実は、高麗が高句麗の後裔たちが建てた国、高句麗を継承した国であることを雄弁に物語るものである。

※○の中は原筆者、□の中は訳者による註

## 高句麗・渤海遺跡に対する最近の発掘研究成果について

孫秀浩（社会科学院考古学研究所所長）

近年、社会科学院考古学研究所では、高句麗および渤海の歴史と文化の優れた発展の様子が科学的に証明され、また体系化された条件のもと、これを新しい実物の史料で証明するために行った発掘研究で特筆すべき成果をあげた。

まず高句麗の遺跡で注目すべきは、平壤一帯の壁画古墳の発掘と長寿山周辺に位置する「南平壤」遺跡の再調査である。

平壤一帯の発掘では、平安南道江西郡の台城里3号壁画古墳と黄海北道燕灘郡の松竹里壁画古墳をあげることができる。

台城里3号墳は羨道、門室、前室、側室、玄室、回廊からなる多室墓である。壁面の損傷が激しく壁画の主題や内容を明確にすることはできないが、古墳の門室西壁南側には幅広のパジと先の尖ったクツをはいた男性の足と幅15センチメートルほどの赤い柱が描かれていた。墓室からは漆喰面に描かれた壁画片が数多く確認され、その中には雲紋をあしらったものもある。ここからは純金製花弁装飾品1点、金製杏葉形装飾品4点、銅製釧2点、朱玉1点、黄緑釉陶器片数点、鉄製棺釘30余点、花崗岩製の柱頭、小櫨、檐遮などが出土した。

台城里3号墳は、その規模や構造形式、出土した遺物などから王陵級といえ、これは近年

の高句麗壁画古墳に対する発掘調査中、学界の耳目を集めた「特大級の発掘」といえよう。またこの古墳の平面構造は、黄海南道安岳郡にある故国原王陵（安岳第3号墳）と回廊の先に延びる補助通路を設けた点まで酷似し、ただ回廊の方向が正反対ということが相違するだけである。このことは二基の墳墓が同時代に造営され、密接な関連性があることを物語っている。

朝鮮学界では安岳第3号墳を故国原王陵としたが、台城里3号墳は故国原王の父王である美川王の改葬墓といえる。このことは美川王陵を安岳第3号墳や平壤駅前古墳とみる説の不当性を証明する貴重な成果となった。

松竹里壁画古墳は羨道、前室、間道、玄室からなる二室墓である。壁面には武士図・行列図・狩獵図などの人物風俗図が描かれ、これは高句麗文化の発展模様と生活風情をよくみせてくれている。壁画はすべての壁面に黒、赤、黄、白、濃紺の色で描かれている。壁面両隅には朱色の太い柱があり、まるで木造建築物の内部のように装飾されている。また様々なモチーフの壁画が描かれている。羨道の東西両壁には武士の隊列図が見えるが、これは長矛をかかげ鉄製鎧で武装した鎧馬武士と重武装で秩序正しく行進する武士の姿である。前室東壁には騎馬隊や歩行する人物、犬などの行列図が描かれ、西壁には虎や鹿を狩る狩獵図もみることが出来る。南壁には鎧冑で武装した門衛が描かれている。門衛は間道の両壁でも確認された。玄室東壁には車をひく動物と後部が高い帽子をかぶる人物が、北壁には平床に座る主人公が描かれている。

古墳からは金銅製指輪、銀製簪、銀飾棺釘、輪形棺用把手、数体分の陶器片などが出土した。松竹里壁画古墳は黄海北道で初めて発見された高句麗壁画古墳であり、このことは平壤一帯における高句麗壁画古墳の分布範囲を確定するための重要資料といえよう。

近年の高句麗古墳発掘で注目されるものには、2006年6月に平壤市統一街で発掘された双室石室封土墳もある。ここからは金製步揺3点と「五銖銭」片、鉄製棺釘などが出土した。步揺は厚さ0・1ミリメートル程度の金板を用いて花卉や魚を象っている。これまで統一街周辺では古朝鮮末期と楽浪国時代の木槨墓・埴室墓が数多く発掘されてきた。石室封土墳も稀に発見されていたが、高句麗早期の墓制である双室墳が確認されたのは初めてのことである。

長寿山遺跡の発掘は1980年代に開始され、この遺跡が4世紀代の高句麗「南平壤」遺跡と確認された。

2007～2008年にわたる今回の発掘では、土城（峨洋里土城、トマドン土城）と道路遺溝、瓦当、門郭石、八角形支石などが確認された。土城はすべて本来の地層上に、まず大きめの石や砂を敷き、さらに小さな石と砂を用いて築いていた。道路遺溝は月党里土城内と載寧江対岸にある月党里地区から発見された。

土城内の遺溝は、地表から50センチメートルの地点で確認されたのだが、それは幅2・9メートル、厚さ20センチメートルである。月党里地区からは120メートルの間隔をおき平行に延びる幅2・6メートルと4メートルの道路遺溝が確認された。これは地表から45センチ

チメートルの地点で確認され、その方向は南北、厚さ20～25センチメートル程度である。ここからは高句麗の瓦当や陶器も出土している。

この度の発掘調査を通じ、長寿山城の南側に築かれた土城の規模や築造方法が明らかにされ、また城内とその外側に整然と区画された里房が展開していたことがわかった。

高句麗遺跡は平壤市大聖区域と三石区域、平安南道南浦市、黄海南道銀川郡一帯からも確認されている。

渤海遺跡の発掘で注目されるのは、朝鮮国内で初めて渤海時代の壁画古墳が発見されたことである。

古墳は咸鏡北道花台郡錦城里の中心から北におよそ500メートル離れた丘陵にある錦城里古墳群から発見された。これは墓室が地下に位置する石室封土墳で、羨道が中心にくる単室墓である。墓室は正方形、天井は平天井である。また玄室中央にある棺台からは夫婦とみられる2体の遺骨が確認された。大部分の壁画は剥落していたが、北壁下方に白い脚絆を巻きクツを履いた人物の足が確認され、また剥落した壁画片に蓮華台にたつ神仙や優雅な蓮華紋がみえることから人物風俗図が描かれていたと思われる。玄室からは金鍍金した青銅製蓮華紋装飾、青銅製隅部装飾、青銅および鉄製棺釘、硯、陶器など数十点の遺物が出土した。

この古墳の築造期は、近接する錦城里1号墓と同じ平天井をもつ長方形の石室封土墳であり、出土した硯が上京龍泉府出土のものと酷似し、また青銅蓮華紋装飾の蓮華紋が渤海期に多用され、棺釘が高句麗のそれよりも短い渤海のものであることから推して渤海期に相当す

るといえる。この古墳の壁画と遺物は、高句麗と渤海の文化継承関係を示すとともに朝鮮の中世の主権国家であり、「海東の盛国」と呼ばれた渤海のすぐれた文化とその独自性を示す貴重な資料である。

その他にも清津市青岩区域富居里一帯で多くの墳墓・城壁・烽火台址・寺院址などが、吉州地域では大型祭壇址・墳墓などが発掘調査されている。

今後われわれは、古朝鮮、高句麗、渤海の遺跡に対する発掘調査を精力的に行い、民族の輝かしい歴史と文化を実物資料として提示するために尽力していくことであろう。

## 平壤の高句麗遺跡を歩く

呉陽希（朝鮮新報記者）

### 1. 檀君、東明王 始祖王の王陵を奉る

高句麗は427年「長寿王15年に（集安から）平壤に都を移した」（『三国史記』）。遷都から1500年以上経った今日も平壤は高句麗の人々の息吹を感じられる場所だ。

紀元前277年、高句麗の始祖王である東明聖王・朱蒙が現在の中国遼寧省桓仁に五女山城を築いて高句麗を建国したときから千年あまりの間、現在の中国東北地方と朝鮮半島の大部分の地域を占め、三国時代の歴史と文化の発展を主導し、東方の強大国として覇をとなえた高句麗。大城山文化遺跡管理所学術研究員の李定男さんの案内で平壤市内の高句麗遺跡を訪ねた。

「約1500年前に先祖が生活していたこの場に立っていると思うと胸が躍りませんか」と、李さんは温和な口調で語りかけてきた。

高句麗は平壤に遷都した折に、東明王朱蒙の陵墓を平壤市の真坡里、現在の龍山里の丘に移送するとともに、大城山一帯に安鶴宮（王宮）と大城山城（安鶴宮の防衛城）を建てた。当時の高句麗は大城山城を首都城として、防衛力を最大限に高めるため、立地選びに大きな関心を寄せたという。大城山城の城壁の周囲は7.6キロメートル（総延長9284キロメー

トル）で高句麗の城壁中最大規模のものだ。蘇文峰から周囲を見渡すと向かい側に長寿峰が見え、乙支峰、北将台、国土峰、朱雀峰が連なっている。高句麗の山城は山の峰々に沿ってほぼ楕円形城壁を築く。この特異な地形を利用した大城山城は典型的な高句麗山城だという。周囲より地理的に高い位置にあることから、城外にいる敵が内部を見ることができず、弓などの武器を撃つても城内まで届かない。また、約2.7平方キロメートルの敷地内には、戦時には多くの人々が避難できた。

大城山の南には大同江が流れ、西には合掌江が、東には長寿川があり、北には青龍山城の峰が連なっている。李さんはこのような地理的特徴から大城山城が「難攻不落の要塞」だと呼べたと言明した。

現在、蘇文峰と乙支峰の間の40メートル区間には高句麗時代の城壁が残っている。高句麗の人々が積み上げた赤茶色の石に手をあててみると当時の人々の姿が目の前に浮かんでくるようだ。

大城山にはいたるところに水が湧き、井戸が多く年中水が溢れており水に困らないという。山城内部にある170あまりの池の中でもっとも高い位置にある「九竜池」は一辺の長さが18.2メートルの正方形で水深が3メートル、容積は約1000立方メートルで100万リットルに相当する。これらの池には昔から伝わる伝説が多い。

蘇文峰から南側を見下ろすと四角形の跡を残す安鶴宮跡が見える。622メートル四方の城壁に囲まれ、敷地面積は約38万平方メートルに及ぶ。当時近隣のどの国にもこのような大



規模の王宮はなかったという。

「これを見てください」

李さんが安鶴宮とその周辺の縮図版を取り出し、ある興味深い事実について話してくれた。人工衛星が撮影した写真で測定したところによると、安鶴宮と檀君陵（古朝鮮の始祖王檀君が葬られた墳墓）、東明王陵を線で結ぶと、安鶴宮を起点に直角三角形ができ、その距離を見ても安鶴宮―檀君陵21・7キロメートル、安鶴宮―東明王陵20・4キロメートルとほぼ等しいというのだ。

李さんは「この不思議な現象は偶然起こったことではない。高句麗の人々が重大な目的を達成するために高い科学技術と国家の総力をあげて創造した結果」だと説明する。

高句麗は始祖王の陵を立派に構えることを首都建設の重要な目的のひとつと見なし、東明王陵を移し、それとともに平壤にあった古朝鮮の始祖檀君の墳墓を高句麗形式に改葬した。実際に1993年に平壤で発掘された檀君陵は高句麗の典型的な墳墓の形式だった。

「高句麗の人々は広大な領土と3000年の古い歴史をもち古代東方アジアの歴史を輝かせた古朝鮮の歴史を誇りに思ったのでしよう」

高句麗王家と民は、強盛を誇った建国の始祖である東明王と朝鮮民族の始祖である檀君への尊崇の思いを抱いて、安鶴宮で2人の王陵を共に奉ずることができるように首都建設を行っただと考えられている。

## 2. 牡丹峰の絶景、乙密台、最勝台

平壤の美しさをうたった詩は多い。なかでも15世紀の詩人曹偉が平壤の名勝をうたった詩「西京（平壤）八詠」が名高い。詩の一節ずつをとったものが「平壤八景」として今に伝えられている。その内容は、乙密台の春、浮碧楼の月、永明寺のあかね空、普通江の送別、大同江の舟遊び、愛蓮堂の雨景、龍岳山の森、馬灘の雪どけなどである。ここには高句麗遺跡と関連するものが多い。かつては国を守るために建てられた将台（指揮所）も現在は市民の憩いの場として、年中にぎわっている。

数日間降り続いた雪で平壤市内に真っ白な雪景色が広がる中、平壤城内城の北の将台だった乙密台を訪れた。乙密台は高さ11メートルの石築台の上に建てられた楼閣。6世紀の半ば、平壤城内の北側指揮所として建てられ、1714年に修築された。現在ある楼閣は朝鮮王朝時代のものだが、その「土台と城壁」の石垣の下部分は高句麗時代に築造された。

「乙密台という名前の由来にはいくつかの説がある」と大城山文化遺跡管理所学術研究員の李定男さんは言う。

高句麗の名将乙支文徳の息子、乙密將軍が同所を守ったので「乙密台」とよぶようになったという説。さらに風光明媚なこの地に天から「乙密神女」が降りて来て、遊んだという伝説に由来するという説もある。

乙密台から周囲の景色を見渡すと、南東方面約200メートルのところ、海拔96・1メー

トルの峰に建立された将台、最勝台が見える。平壤の風致が一望のもとにおさめられる最上の地という意味で、こう呼ばれるようになったそうだ。

現在、錦繡山全体の総称を牡丹峰と呼んでいるが、もとは最勝台のある峰を「牡丹峰」と呼んでいたという。「5月にはつつじやれんぎようが満開になって本当に美しいですよ」と李さんは顔をほころばせながら話した。

李さんの言葉通り、花盛りの最勝台や乙密台の美しさは言うまでもないだろうが、雪化粧をした冬景色もまた風情がある。

「三国史記」には392年に高句麗が9つの寺を建てたという記録がある。

李さんは、「370年に中国から仏教が伝わって以来、宗教は国家のイデオロギー統治の手段として用いられた」と説明する。

浮碧楼からはゆつくりと流れる大同江を見下ろすことができる。平壤八景にうたわれた「浮碧完月」（浮碧楼と大同江に映った月夜の風景）と「永明深勝」（あかね空に染まった永明寺一帯の風景）は浮碧楼の絶景をうたったものだ。浮碧楼のそばには一段の高さが25センチほどの石階段がある。32段の石階段は高句麗時代に築造された。高句麗の僧たちが階段を上り下りする姿を想像しながら石段を踏みしめると感慨がいつそう深まる。

すると、ここでもうひとつの高句麗遺跡と出会うことになった。永明寺の僧の墓だという。高さ60センチほどの石の墓がひっそりと立っていた。「ここに墓が残っていたとは」。李さんも今回訪れるまで知らなかったという。墓のある場所が立ち入り禁止区域だったためだ。墓

の側面には文字が刻まれており、そこには墓の由来が詳しく記されているという。「すぐにも確認作業にとりかからねば」と李さんは意気込んだ。

### 3. 高句麗の人々の息遣い

平壤での高句麗遺跡の発掘は今年も活発に行われる予定だ。2007年にも平壤城城壁の一部が発掘された。「遺跡は歴史の確かな証言者」だと李定男さんは語る。

李さんに案内されたのは平川区域にある万寿台創作社横の空き地だった。空き地には幅が8～9メートルほどの石壁がある。

「これは平壤城の城壁なんですよ」とはいえ、「城壁」を想像するのが難しいほどにその石壁の姿は断片的なものだった。

「道路の向かい側を見て」と李さんが指さす方にも同様の石壁があった。道路を挟んで真つ二つに断絶された石壁は、元は平壤城外城の城壁の一部としてつながっていた。日本の植民地統治期にここに軍事演習場を作る際に壊されたのだ。

「三国史記」によると、平壤城は552年から586年まで35年間にわたって築かれた都城。平壤城の城壁は現在の牡丹峰区域、中区域、平川区域を囲んだ。平壤城の内部構図は、牡丹峰区域から中区域、平川区域に下りながら内城の防衛城で宗教関係の施設があった北城、王宮があった内城、中央官庁があった中城、住居区域の外城に分かれた。

平壤城の周囲は16キロメートル（城壁の総延長は23キロメートル）だ。平壤城は同じ高句麗の城とはいえ大城山城とはまた違う方式で築かれた。大城山城の場合、王宮である安鶴宮の後方に防衛城として構え、有事の際には王宮から後方の山城に移動して避難した。平壤城の場合は、山城の中に王宮を建てた。平壤の特異な地形を最大限に利用したもので、これによって人々は有事の際の移動の不安がなくなったと李さんは説明した。高句麗全盛期の戸数は、周辺地域を含めて21万508戸に達したという記録が残されている。

現在の平壤市の5つの道路をつなぐ交差点にそびえる普通門は552年に建てられた。「普通門は『神門』とも呼ばれているんです」と李さんは言う。

秀吉の朝鮮侵略（1592―1598）の際、平壤城の城門でこの門だけが燃えずに残った。朝鮮戦争（1950―1953）時には、米軍の苛烈な空爆により破壊されたが、戦後、朝鮮政府の文化遺産保存政策によってみごと復旧された。現在の建物は1473年に建て直されたもので、朝鮮に残っている城門のなかでもっとも大きく古いもののひとつだ。中城の西門である普通門は国防上、交通の要衝に位置し、高句麗時代から高麗、朝鮮王朝にいたるまで重視された。

李さんによると、普通門の元の位置は現在の場所ではない。かつては今より北西方向55メートル先の普通江沿いにあったのだが、戦後、首都建設のためにこの位置に移された。

平壤城内城の東門だった大同門の門楼には当時、平壤鐘がかかっていた。日に2回、午前4時と午後10時に鐘を鳴らして人々に時間を知らせた。午前4時の鐘で平壤城の城門が開き、

午後10時の鐘で閉じられた。人々は楼閣の下のアーチ型の通路を通って出入りした。正面には大同江が流れ、背面には現在、道路越しに金成柱小学校が建っている。

「高句麗の人々の姿を描いてみませんか」。李さんはこのように言いながらアーチ型の通路をゆっくりと往復した。私も李さんの説明をかみしめながら後ろに続いた。

「高句麗の人々の息遣いが伝わってきましたか。先祖たちと対話ができる学問がまさに考古学なのです。知るほどに高句麗の存在がとても近く感じられるのです。遺跡は歴史の確かな証言者ですから」

（本稿は「朝鮮新報」2008年1月16日、18日、21日付に掲載されたものを編集した）

## PACHINKO KOKUSAI CENTER

男女社員募集中

娯 楽 の 殿 堂

国 際 セ ン タ ー

有限会社 国際商事

東京都新宿区高田馬場2-18-11  
電話03(3200)3667

有限会社

ケ ー ス ク ラ フ ト

熱硬化性、熱可塑性成形加工

代表取締役 安 順子

〒962-0203

福島県岩瀬郡長沼町大字長沼字町尻26-5

TEL 0248-77-1129

FAX 0248-77-1333

携帯 090-5397-8455

朝鮮歴史時代区分表

時代	時期	時代・国家名	年 代
原始		旧石器時代 前期	100 万年前～30 万年前
		中期	30 万年前～5 万年前
		後期	5 万年前～1 万 5 千年前
		中石器時代	1 万 5 千年前～9 千年前
		新石器時代	B.C.7 千年期～B.C.3 千年期初葉
		青銅器時代	B.C.4 千年期後半期～B.C.3 千年期初
古代 (奴隸制)		前朝鮮(檀君朝鮮)	B.C.30 世期初～B.C.15 世期中葉
		後朝鮮	B.C.15 世期中葉～B.C.194 年
		扶餘	B.C.15 世期中葉～B.C.219 年
		句麗	B.C.15 世期中葉～B.C.277 年
		辰国	B.C.12 世期頃～A.D.1世期初葉
		満朝鮮	B.C.194 年～B.C.108 年

中世(封建制)	三国	高句麗	B.C.277 年～668 年
		後扶餘	B.C. 2 世期初～494 年
		百濟	B.C.1 世期末葉～660 年
		前期新羅	A.D.1世期初中葉～676 年
		伽倻(金官)	A.D.1世期中葉～562 年
		東扶餘	285 年～494 年
		北扶餘	4 世期中葉～5 世期中葉
	渤海・後期新羅	渤海	698 年～926 年
		後期新羅	676 年～935 年
		後百濟	900 年～936 年
		泰封	901 年～918 年
		高麗	918 年～1392 年
		朝鮮(李朝)	1392 年～1860 年代初葉 1860 年代初葉～1910 年(近代)

出典《朝鮮歴史地図帖》(社会科学院、国家測地局出版、朝鮮語版 2007 年 11 月 30 日発行)



株式会社  
**タイセイグループ**

代表 **李 学 秀**

本 部	岐阜市六条江東 2 丁目 12 番 3 号
	TEL <058>272-9826 (代)
	FAX <058>276-7926
岐南事務所	羽鳥郡岐南町上印食 9 丁目 74 番
	TEL <058>248-6366
	FAX <058>248-6356

**躍進する企業グループ**  
**く い ー ふ**

代表取締役社長 **崔 東 明**

〒231-0045 横浜市中区伊勢佐木町3丁目98番  
TEL 045 (251) 1958